



寅丸真澄著

学習者の自己形成・自己実現を 支援する日本語教育

ココ出版、2017年発行、329p.
ISBN : 978-4-904595-87-9

佐藤 正則

1. 自己形成と自己実現を支援する日本語教室へ

本書は、著者の寅丸真澄氏が、2014年度に早稲田大学大学院日本語教育研究科に提出し、学位を授与された博士論文『日本語教室における意味世界の協働構築とコミュニティの創造—日本語学習者の相互行為と認識の変容を通して』に加筆、修正を加え刊行されたものである。

本書における学習者の「自己形成」とは「学習者が日本語による他者との相互行為を通して、自己の認知的、情動的世界を拡大、深化させていくこと」であり、「自己実現」とは「そのような相互行為を通して他者と人間関係を構築し、その他者とともにコミュニティの価値の創造に参加することによって、そのコミュニティの構成員として承認されていくこと」である (p. 288)。著者は、このような自己形成と自己実現の変容を経験させることが、日本語教室において重要だとする。では、学習者の自己形成と自己実現の支援は、どのような日本語教室で可能なのか。著者は、「(1) 日本語教室におけることばの学びとは何か」「(2) (1) の学びをめざす日本語教育ではどのような実践が行われるべきか」という二つの課題を立てる。そして、前者については理論的考察、後者については、理論的考察を踏まえた実践の記述によって課題を明らかにすることがめざされる。

本書において詳細に記述されている「日本語教室」は、細川 (2009) の理念に基づいて設計された学習者主体のレポートクラス「考えるための日本語 5」(以下 RC5) の実践である。RCのような「総合活動型日本語教育」は、教師が最終的な答えを持たないことを前提とする。したがって、「学習者と教師が相互主体的な協働によって教室を自律的に立ち上げ、創造していくこと」(p. 77) が期待されており、担当者の実践についての理解や、教育観、学習者の背景や性格等によって全く異なるクラスができる。著者は、本書で描かれる実践に入る前、2期に渡ってRCクラスにボランティアとして参加した経験を通し、「教室活動の予測可能性」と「予測不可能性」があるという感覚を持つようになった。その「予測可能性」を促す仕掛けこそが「対話」であり、著者はそこに「学習者の自己形成や自己実現を支援する日本語教室の具体的なありようを解明する手がかり」(p. 78) があると確

信した。そして、翌年度から RC5 の担当者として、教室設計から評価までの実践を行いつつ、その具体的なあり様を探究していった。その成果が本書である。本書は RC5 という個別な実践の記述であるが、「RC5 に関わった人々の声と筆者の自己内対話の声」(p. 18) の膨大なデータを多声的に織り込むことによって、設計から評価までを通時的に描くと同時に、日本語教育実践としての普遍性を獲得することにも成功している。

以下からは、まず本書の概要を紹介し、次に本書の意義と課題を述べていきたい。

2. 本書の概要

本書の構成は次の通りである。第1章では研究の目的と課題が示される。第2章では一つの課題「日本語教室におけることばの学び」についての理論的な考察が行われ、学習者の自己形成・自己実現を支援する日本語教育の必要性が提示される。第3章から第5章までは、学習者の自己形成・自己実現を支援する日本語教育の実践の具体的、実証的な分析が行われる。そして6章では、改めて理論編と実践編の結論が記述されている。

2.1 本書の目的と課題

第1章は本研究の目的と課題が示される。ある学習者から「意味のある授業を受けたい」という相談を受けたことを契機に、著者は「意味のある授業とは何か」についての考察を始める。そして「教育」という視点から俯瞰的に捉えることによって、日本語教育の教室においても、「意味のある授業」、すなわち学習者の自己形成や自己実現の支援が重要であると述べる。しかし、そのような実践は、教室観の未成熟と実践研究の不足により、十分に行われていない。そこで、前述の二つの課題が示されることになる。

2.2 日本語教室という場

第2章「日本語教室という場」では、まず、教育学、発達心理学、成人教育の知見から、学習者の自己形成や自己実現を支援する日本語教室の重要性が指摘される。そして、学習者の自己形成や自己実現を支援する日本語教育を実践するためには、日本語教室という場を、「母語から日本語への意味世界の再構築」と、「他者との相互行為による意味世界の再構築」という二重の課題を越える場、さらに、「他者と相互主体的に意味世界を協働構築することによって教室コミュニティを創造する場」として捉える必要があるとする。そのために教師は「学習者が日本語の記号的意味世界と存在的意味世界を協働構築できるような相互行為を促すとともに、それによって教室コミュニティが創造できるような教室活動を設計、運営していくべきである」(p. 41) とする。

第2章後半では、学習者の自己形成や自己実現を支援する実践がどのように行われてきたか、その課題は何かを明らかにするために、従来の日本語教育実践における教室観の歴史の変遷が検証される。日本語教育学会誌『日本語教育』創刊号から157号に掲載された実践研究論文163本について、実践の目的と相互行為の質に着目して分析し、言語形式習得の場という第1の教室観、言語技能獲得の場という第2の教室観、人間形成の場という第3の教室観に区分する。そこから、学習者の自己形成や自己実現を支援する実践、すな

わち人間形成の場という第3の教室観に基づいた実践が重要であるにもかかわらず、日本語教育においては、そのような実践が未だ十分に行われていないことが明らかにされる。そこで次章からは、学習者の自己形成や自己実現を支援する日本語教室のありようを明らかにするために、RC5の実践が記述されていくのである。

2.3 教室設計と教師の役割

第3章からは、第3の教室観で設計されたRC5の実践記述が始まる。3章「教室設計と教師の役割」では、まず、RC5の教室活動の枠組みが示され、教室設計と教師の役割が記述される。

まず、RC5の教室設計の特徴として、①教室活動の前提としての「宛名性」と「他者性」、②存在の意味を開示する権利と義務、③「問い」と「応答」による記号的意味と存在の意味の協働構築、④主体性と自律性を育む公平な役割システム、⑤意味構築と公平な役割システムを実現する「居場所」としての「場」、⑥社会文化的文脈とアイデンティティを縫り合わせた結節点の創造、が示される。次に教室運営の特徴として、①主体性と自律性の担保、②公平性の担保、③時間と場の担保、④応答義務の徹底、⑤「居場所」の担保、⑥省察の促進、が示される。また、著者は、RC5の教室活動を、学習者一人一人の活動の「場」の集合体として捉える。RC5では、学習者5人からなる「学習者の場」、「全体の場」、「教師の場」の7つの場に分けられた。

3章の後半では教師の役割が論じられる。「学習者の場」、「全体の場」、「教師の場」の具体的な相互行為の分析を通して、活動のルールや意義を学習者と共有し枠組み作りを行う「教師としての役割」、活動の枠組みを土台に、学習者が活動理念や主要概念を主体的、自律的に再構築するのを支援する「教師と学習者としての中間的役割」、学習者と同様の立場で活動を行う「学習者としての役割」が抽出される。「学習環境設計者」としての日本語教師は、「一方的に活動を管理したり」「学習者に教室運営を一任したり」するものではなく、それぞれの「場」を認識し、「場」にふさわしい役割を担うことが重要だと著者は主張する。

2.4 教室活動における相互行為

第4章「教室活動における相互行為」では、教室活動で取り上げられた「テーマ（話題）」が着目され、テーマの記号的分析と、「ことば」の存在的分析によって、教室活動における意味世界の協働構築のありようが明らかにされていく。学習者は固有のテーマをレポートのテーマとして選ぶが、それは話し合いにおける「話題」にもなる。本章ではまず「理想の都市」という話題が、自己から自己と他者、そしてコミュニティで連鎖的に協働構築されていく様子が記述される。学習者それぞれの専有物としてばらばらに持ち寄られた話題が、相互行為の過程で、互いに専有され変奏されて、やがて参加者全体にとって重要な話題になっていく様子が明らかにされる。

次に、教室活動における「ことば」をめぐる相互行為の存在的分析が行われる。二人の学習者が相互行為を通してどのようなことばの学びを得たのかが記述される。そして、「ことばの記号的意味世界と存在の意味世界が協働構築されていく過程と、ことばが<自己><他者><教室コミュニティ>へと拡大していくありよう」(p. 208)が明らかにされる。

2.5 変容する学習者と教室コミュニティ

第5章では、RC5における「学習者の認識」の変容が二人の学習者の事例を通して描かれる。学習者サシヤは、日本語学校時代に形成された「日本語に対する劣等感という自己認識と、劣等感に起因する特定の他者への他者認識」(p. 237)に問題を抱えていた。だが、RC5に参加し、そこで自分を「見下さない」他者に出会い、信頼感を深めることによって、他者認識を変容させていく。日本語教育実践として特筆すべきは、「言語活動、それも高度な思考を言語化するという活動」においてサシヤの変容が可能になったということだ。「他者に有効な情報を提供し（「情報提供者」）、他者の要求に答え（「応答者」）、他者の思考の深まりに寄与し（「質問者」）、他者の思考を変革し（「説得者」）、他者の思考や行動に寄り添う（「助言者」）という言語活動」(p. 239)を通し他者やコミュニティに貢献することによって、日本語に対する劣等感と、それに起因する他者認識を変容させていくのである。それは、サシヤにとって、日本語教室における自分の「居場所」と「意味」を見いだしていく過程でもあった。

学習者ミンの事例では、自己認識と社会認識の変容の過程が記述される。活動参加者との相互行為の記述から、著者はそのプロセスには「精緻化」「混乱」「揺らぎ」「受容」「統合」の段階があることを明らかにしている。そのようなプロセスを経て、ミンは現実と理想の自己の溝を認識し、新たな自己を構築していく。「学習者の自己形成や自己実現を支援する日本語教室では、学習者が相互行為の中で、互いの生の文脈を縫い合わせて影響し合い、それぞれの将来に必要な不可欠な認識の変容を遂げる可能性が常に拓かれている」(p. 255)のである。

第5章の後半では、RC5における教室コミュニティの創造過程が評価活動という点から記述される。RC5では「レポート執筆活動と評価活動の2つの活動は同時並行的に行われ、レポート完成後、教室活動全体を振り返る相互自己評価会で集約され帰結した。レポートを書き検討する中でレポートに対する評価観が育成され、その評価観をもとに相互自己評価のための評価方法と評価項目が合意形成された」(p. 257)。著者は、〈全体の場〉における「相互自己評価のための評価方法と評価項目」の合意形成の過程を、教室の相互行為の分析から明らかにしていく。そして、その過程は教室コミュニティの創造の経験であったと結論する。

第6章では、理論と実践の記述と考察から、本書の結論が述べられる。日本語教室におけることばの学びとは、日本語教室ではどのような実践が行われるべきか、という二つの課題の答え（2章から5章までに詳述）が改めて記述される。

3. 本書の意義と課題

本書の意義は、自己形成や自己実現を射程に入れた日本語教育の意味を検証した上で、著者自らの実践において、その過程を縦断的、横断的に記述し、可視化したことである。1章で著者が述べているように、従来、RCのような活動型日本語教育は、複雑性と予測不可能性ゆえに「今ここ」でしか経験できない実践として個別性が強調されることが多かった(p. 10)。そこでは教師の暗黙知が強調されてきたのである。しかし、著者は、RC5に

における日本語教室の現象を、教師の役割、教室活動の相互行為、学習者やコミュニティの変容という観点で分類し、実践の中の「確固とした規則性や予測可能な事象を拾い上げ」(p. 21) 記述することによって、活動型日本語教育の地図を描ききった。その意義は大きい。

だが、上記とは矛盾するかもしれないが、私が最も興味深く感じたのは、一回性、個人的な記述である。「自由」を巡る議論や、「悪魔化」、「民主主義」ということばを巡る学習者間の激しい対立、一步間違えればクラスが崩壊するかもしれない危機を、彼らは何度も経験する。だが、その度に彼らは、互いのことばやテーマに向き合い、対話によって危機を乗り越えながら教室コミュニティを形成していく。本書におけるリアリティは、これらの個別的な記述に宿っているといてよい。

一方で、本書の記述に物足りなさも感じた。それは、実践に対する著者の自己言及的な視点の不足である。本書では教室参加者の相互行為が客観的に描かれている。だが、そこに教師の顔は見えない。期を通して教師は、どのような問題や課題に出会い、悩み、葛藤し、同僚と協働で解決していこうとしたのか、そのプロセスの省察、記述があってもよかつたのではないか。なぜなら、学習者の自己形成や自己実現、教室コミュニティの形成という第3の教育観の実践を志す日本語教師が、実践者の内省的な記述を読むことによって、本書に描かれた学習者の変容や教室コミュニティの形成をより深く理解できるからである。

さらに、学習者の自己形成や自己実現を支援する日本語教育観を、第3の教室観とするならば、RC 以外の実践でも、学習者の自己形成や自己実現の視点からの分析、考察も必要であろう。本書で著者が述べているように、本実践とは活動内容の異なる様々な実践においても自己<>他者<>教室コミュニティ<>の関係性に着目し、「相互行為の質」を担保するにはどうすればよいのか (p. 296) 考えていく必要があるだろう。著者の今後の固有の実践を期待したい。

AI や CAI の発達によって、日本語教師や日本語教室の価値が問われるようになって久しい。第1、第2の教室観の実践は、そう遠くない未来に AI や CAI に取って代わられる可能性がある。しかし、第3の教室観の実践は、日本語教室以外のコミュニティやインターネットでの相互行為では代替できないと著者は述べる。現代ほど「自己認識や他者認識、社会認識を変容させながら、他者との協働でコミュニティに必要な価値を生み出し、新たなコミュニティを創造していけるようなことばの教育」(p. 297) が必要とされる時代はない。そのような相互行為としてのことばの学びが可能な場こそが「日本語教室であり、その環境設計者が日本語教師」なのである。本書は、日本語教室の現代的意味とそのあり方について、読者に多くの示唆と希望を与えてくれる良書である。

参考文献

細川英雄 (2009) 「動的で相互構築的な言語教育実践とは何か」『社会言語科学』12 (1)、pp. 32-43

(さとう まさのり 山野美容芸術短期大学)